

## 『エミール』に読むルソーの宗教観

福永洋介\*・持田明子

### はじめに

1762年ルソーは近代教育の原点とも言われる『エミール』を出版した直後に弾圧され、フランスを出て行かねばならなくなる。これはとりわけ『エミール』第四編に記されている「サヴォワ助任司祭の信仰告白」が当時のカトリック教会の宗教観と相容れなかったことからパリ大学神学部で訴えられ、高等法院により有罪判決を下されたことによる。次いでプロテスタントの地、ジュネーブにおいても『エミール』は禁書処分にされ、ルソーのその後の人生は迫害を避けるために、各地を転々とすることを強いられる。

ルソーは日本において啓蒙思想家の代表者として、また『社会契約論』の著者としてその名が知られ、長年、様々な研究、考察がなされている。

彼の思想はフランス革命へとつながる根本となり、また教育においてはその後の近代教育に大きな影響を与えるものとなった。

今回取り上げた『エミール』は教育論であり、ルソー自身が「二十年間の省察と三年間の仕事を必要とした著作」と言っている作品である。この作品は小説と論文が混合されたもので、ルソーがエミールという空想上の一人の生徒を、生まれた瞬間から、一人前の人間になるまで導いていくものである。この作品は社会状況がまったく変化してしまった現代においてもなお教育論のバイブルとされている。

『エミール』は決して古典ではなく現代においても、その原理、考え方は活かすことができるものであり、今日こそ考えなければならない問題に大きな示唆を与えてくれる。

ここでは当時問題になった『エミール』第四編に注目し、ルソーの宗教観を考察する。

### 1 18世紀フランスの民衆と社会

『エミール』第四編については次章でその内容に触れることとし、ここでは18世紀フランスにおけるカトリック教会の社会的地位とその影響力、当時の社会状況、人々の

---

\* 九州産業大学大学院 国際文化研究科 博士課程（5年一貫制）3年

一般的な思想、宗教観を考察する。これらをふまえて、ルソーの宗教観がなぜ弾圧、迫害の対象となったのかを明らかにするためである。

### (1) 教育状況

18世紀は「啓蒙の世紀 (le siècle des Lumières)」と一般に言われるように、「啓蒙思想家」たちがそれまでの絶対王政、教会の権威という既成の価値観を様々な論法により、否定する時代である。唯一絶対的な王による支配を否定し、民主的な国家を作ろうとする動きが、1789年のフランス革命へとつながっていく。『エミール』はフランス革命直前のそのような時期にパリで出版され発禁処分された。この時期、フランスの教育状況はどのようなものであったのか。

フランスでは16世紀すでにプロテスタントが必要な識字教育を行い、これについてカトリックも17世紀に教育を行うようになった<sup>1)</sup>。この識字教育は聖書を日常語訳で読むために必要とされたもので、教会は教化活動の一環として民衆に識字教育を行った。両者ともに教育は布教、教化の活動になっており、《実際の教育は、聖書、教理問答集、礼儀作法書などを教科書として「善良なキリスト者」となることが理想とされたため、簡単な読み書き・計算以外に知育・実用教育はほとんど施されなかった<sup>2)</sup>》と『フランス近代史』で服部春彦、谷川稔が述べているように一般の人々の知育教育を目的としていたのではない。

カトリックは都市部では既存の有料教区学校を発展させる一方、貧しい子どものための慈善学校の開設支援にも着手している<sup>3)</sup>。「プチテコール (petite école)」と呼ばれた学校は、教会管理の下、民衆の教育を担ったものであるが、学校の数は少なく地域差もあった。この学校では教義問答を中心に個別教育が行われた。学校の施設や設備は粗末なものであり、教師の質も悪かった<sup>4)</sup>。また慈善学校である「キリスト教学校同胞会 (Institut des frères des écoles chrétiennes)」も当時の教育を担っており、こちらは貧しい民衆に教育を施した。その教育内容は一斉教授式で国語の教育に基礎がおかれるなど、斬新なものであった<sup>5)</sup>。

1698年と1724年にすべての教区に教師をおき、子どもを学ばせることを義務付ける法令が当時の王ルイ14世、ルイ15世により出されるが、これはプロテスタントをカトリックに改宗させるために講じられた措置であり、民衆の知識向上を考えてのことではない。その後も本格的な教育政策は絶対王政下では行われることはなく、フランス革命を経るまで待たなければならない。

こうした教育における成果がどのようなものであったのか。当時の識字率を参照するならば1689年-90年における識字率は男性29%、女性14%であったものが、革命直

前には男性47%、女性27%に増加している<sup>6)</sup>。この数字を見る限り、教会による教育の成果を否定することはできないが、識字率の調査が「婚姻届の署名」を頼りにしていることから、知識層の増加という結果には直接結びつかず、あまり信用性はもてない。

このように民衆の教育は主に教会によってなされ、当然ながら教育内容もキリスト教の教義に重点がおかれていた。一部の知識人を別にすれば、民衆は敬虔なキリスト教徒になるように教育されていた。地域差こそあっても、当時の学校の教育者はカトリック教会の司祭であり、教育指導にはキリスト教の教義問答が使用されていたことから、民衆におけるカトリックの影響力は極めて大きかったと言えるだろう。

## (2) 書籍の出版状況 読者

ここで、18世紀の出版状況を概説しておきたい。

1762年出版の『エミール』がたちまち禁書処分にされ、ルソーがフランスを去らねばならなくなったことは先に述べたとおりである。そこで当時出版されていた書物はどのようなものであったのか、刊行本の種類や特色、出版の傾向、そして「啓蒙の世紀」であるこの時代の出版状況から人々はどのような本を好み、またどのような本が流行していたかを知ること、この時代の人々の趣味、思考、思想を考察したい。『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』によれば、スイスの書籍商ヨハン・ゲルク・ハインツマンは読書こそがフランス革命を引き起こした決定的な要因であると主張している<sup>7)</sup>。

18世紀、啓蒙思想家たちの登場が民衆をフランス革命へと導いたことは広く言われていることだが、この著作では読書こそが民衆に行動を引き起こさせた原因であるという。書物による影響力が多大なものであり、当時の人々は読書により教養を深め、現体制に対して不満のエネルギーをぶつけたものと考えられる。

まず読者たちについてだが、先述の識字率の調査結果をみて、革命に近づくにつれて数字は徐々に増えつつある。この識字率の調査方法にしても「婚姻届の署名」であるから、署名ができることを本が読めることと同義に考えてしまうことはできないまでも、識字率の上昇から民衆の知育の発達を少なからずうかがい知ることができる。また民衆の間には「夜の集い」と言われる集まりが慣行されていたことも看過できない。この「集い」では文盲であった民衆のために、字の読める者が書物を読み聞かせていた<sup>8)</sup>。このようなかたちで文字が読めない者でも書物に触れる機会があり、カフェやサロンで討議、口論されるようなものではないにしても、民衆間の話し合いの場があった。

一方、ブルジョワジーは書籍市場の成長を支えるように、新聞の刊行、読書クラブ

や文芸協会の設立を援助した<sup>9)</sup>。そして自らもその活動に積極的に参加し、フリーメーソンの会員とともに社会、政治、経済問題などを議論する場を作り出した。これらの場において、貴族やブルジョワジーなど多くの人々に書物は広がり読まれた。

書物の所有率も18世紀をとおして増大している。17世紀末からフランス革命直前にかけて、ブルジョワジーの蔵書数は1～20冊から20～100冊へと、貴族と法律家では1～20冊から300冊以上に最頻値の上昇が見られる<sup>10)</sup>。

つぎに書籍の出版状況についてだが、18世紀フランスでは出版された書物の80%がパリで印刷されている<sup>11)</sup>。パリだけに限って書物の刊行推移をフランス全土におけるものとして量れないまでも、80%という数字は当時のフランス国内の出版物について大きな示唆を与える。

したがって18世紀のパリにおける書籍刊行の変化に注目すると、まず刊行される書物のジャンルの変化が挙げられる。17世紀には宗教書がパリで刊行される書籍の約半分を占めていたが、18世紀になると宗教書の比重は著しく低下し、代わって歴史書、自然科学書、倫理学書、商業・経済書、政治書の比重が高くなる。宗教書は17世紀に半数を占めた後、1720年代に3分の1、1750年代に4分の1、1780年代には10分の1と出版数が大きく後退している<sup>12)</sup>。宗教書に代わって科学・技芸の書籍の出版数のパーセンテージは1720年から1780年の間に2倍となっている<sup>13)</sup>。

また18世紀には、書籍刊行の際には1673年に確立された事前の検閲制度が依然機能しており、反王権、反カトリック教会、反良風美俗がうかがえる書物の出版は規制されていた<sup>14)</sup>。さらに書籍の出版業者もパリとリヨンに限定され、出版業者数、印刷機の数、印刷工房の場所などを細かく規定した管理体制下におかれていた<sup>15)</sup>。

しかし、この措置によってフランス国内の出版が規制される一方、国外で印刷された書物がフランスに多く流入していた。『エミール』同様、当時センセーションを巻き起こした『百科全書』（ディドロ、ダランベール編、1751年～72年）は1759年に発禁処分を受けた後も海賊版がジュネーブ、ベルン、ローザンヌなどで刊行されている<sup>16)</sup>。そしてロバート・ダートンが「18世紀の後半に刊行されたフランス語の書物の過半数は、フランス国外の印刷機から生まれた可能性がある<sup>17)</sup>」と述べていることから、いかに多くの書物が流入していたかを知ることができる。

### (3) 非キリスト教化現象

18世紀における書物刊行のこうした変化からも分かるように、宗教書刊行はそれまでに比べ後退する。それは宗教書以外の出版物の躍進に伴うように、当時の人々の関心が時代の変遷と相まって実学的で合理的な方向へ向かったからであると考えられる。

18世紀のいわゆる啓蒙思想家たちは教会・キリスト教への懐疑を各々の著作の中で語り、それらの正当性に疑いをもって論を展開した。

そしてこれに触発されたような現象が起こり始める。18世紀中ごろになるとカトリック教会の教えを軽視する行動、つまり非キリスト教化現象がしばしば見られるに至る。

たとえばパリにあった聖イノサン墓地を非衛生を理由に撤去させたことや、都市部での同棲の増加、避妊の流行、捨て子の増加などである<sup>18)</sup>。キリスト教の性道徳で避妊は逸脱行為であった。避妊はヴェクサン・フランセ地方の村々や首都パリ近郊の農村部、オート・ノルマンディ地方の農村部で行われており、ルーアンを例にとってみると「避妊を行っている」夫婦のパーセンテージが17世紀末に5～10パーセント、18世紀はじめに20～30パーセント、フランス革命直前には50パーセントを超えている<sup>19)</sup>。

またその他にも教会が奨励していた死後のミサを要求する遺言状の減少が挙げられる<sup>20)</sup>。プロヴァンス地方を例にみると、ミサの要求が17世紀末から18世紀半ばにかけて10の遺言状のうち8つにみられるものが、1780年代においては、2つのうち1つの遺言でしか明記されていない<sup>21)</sup>。これは墓地撤去と同様、死後の魂への尊重という意識の希薄化とみなされる現象である。このような現象は主として都市部で顕著なものあり、フランス全域で同じ現象が起こったものではないにしても、一部の地域において従来の教会の影響力が減少し始めていることは確かである。

以上のような社会状況のなかでルソーは『エミール』を執筆し、出版した。

## 2 ルソーの宗教観 サヴォワ助任司祭の信仰告白にみる

『エミール』第四編の中で、思春期の青年になったエミールに対する宗教教育論が書かれ、ルソーの宗教観が語られている。前章で述べたとおり当時のフランスで教育はそのほとんどが宗教教育のことであった。教育を担っていたのは教会であり、教育内容はキリスト教の教理問答を暗記させたり、賛美歌を歌ったりすることで、聖書中心のものであった。

「わたしの生徒の幼少年時代を通じて、わたしがかれに宗教についてなにも語らないのを知って、どれほど多くの読者が驚きを感じるだろう。それをわたしは予想する。十五歳になってもかれは、自分が魂を持っているかどうか知らなかったが、十八歳になっても、まだそれを学ぶ時期ではあるまい<sup>22)</sup>。」

と言っているように、ルソーはエミールにこの時期まで宗教を教えることもなく、その存在も教えてはいない。それはルソーの教育はことばによる教えではなく、経験

を重視しているからであり、これまでエミールは成長過程において宗教と関わりを持たずに生きてきたためである。そのため大人でさえも理解しがたい宗教の神秘を子どもに説明しても全く理解できないことが理由に挙げられる。

また救われるためには神を信じなければならないというキリスト教の教理も、何も理解していない教理の文句を繰り返していればいいのであれば、鳥でも天国へいけると皮肉っている。

「子どもと多くの大人の信仰は地理できることだ<sup>23)</sup>。」

と言う言葉からもわかるように、どの宗教に属するかは両親の宗教や生まれた場所による環境、状況が大きな原因になっている。

そこで「ある者はマホメットは神の予言者であると言われて、マホメットは神の予言者であると言う。また、ある者はマホメットは詐欺師であると言われてマホメットは詐欺師であると言う。この二人は、たがいに相手の国にいたとすれば、それぞれ相手が主張したことを自分が主張したに違いない<sup>24)</sup>。」

という例を挙げてみせる。これはまさしく宗教が文化、慣習と同じく地域に基づいているものであり、信仰もこれに準ずるものであることを示している。

また「自分が神を信じていると子どもが言うとき、かれが信じているのは神ではなく、神と呼ばれるなにもものかがある、とかれに語ったピエールとかジャックとかいう人間なのだ<sup>25)</sup>。」

と言い、子どもが宗教を信仰することは、その神を信じたために信仰するのではなく、結局大人の言うことを聞き、それに従った結果であるということになる。これは現在の宗教にも同じことが言え、各宗教の分布を地図で見れば明らかであろう。

そしてルソーはエミールをどの宗派にも加入させないで、これまで養ってきた理性を使い彼自身が宗教を選べる状態にしてやるという結果を出す。この結果はこれまでのルソーの教育論からいっても当然のように思われる。エミールは神の存在を信じるかもしれないが、当時の既成宗教を信仰するようなことはしないと考えられる。

だが、ここでルソーは

「わたしにとっては誠意と誠実な心がこれまで思慮のかわりになっていた。しかし、自分の判断に疑いをもつことは十二分にわたしに許されている<sup>26)</sup>。」

と、宗教の信仰、選択の判断は難しいもので、それに疑いを持つことがあると述べている。

「ここでわたしは、わたしが考えていることをわたしの考えとしてあなたがたに述べるかわりに、わたしよりましな人だったある人が考えていたことを語ることにする<sup>27)</sup>。」

と切り出し、サヴォア助任司祭の話始める。この話を聞き、読者にこれを検討してほしいというのである。この話はある青年にサヴォワ助任司祭が自らの宗教、神に対する考えを述べるものであり、直接エミールに対して教育を行うものではないが、どのように宗教をとらえ、考えているか、ルソーの宗教観が示される。

これはある青年とサヴォワ生まれの助任司祭との物語である。後に明らかにしているように、この物語の青年はルソー自身であり、サヴォワ助任司祭のモデルは少年時代にルソーが親しくしたトリノのゲーム師とアヌシーのガティエ師である<sup>28)</sup>。

青年はカルヴァン教徒として生まれたが、間違いを犯し、外国へ逃亡し、生活に困った結果、宗教を変えることで食にありつき、生きようとしていた。そこで改宗者のための救護院に入るのだが、青年はその中で、これまで知らなかった悪い教理、風習を教えられ、罪を犯すことを強要される。青年は罪を犯すことを拒否したために罪人扱いされ、不平を言ったために罰せられた。

このような状況の中、青年は天と人々に事情を訴えるが、誰にも聞き入れてはもらえず、一人苦難に陥っていた時に、何かの用事で訪れた聖職者（サヴォワ助任司祭）に出会い相談し、逃亡を助けてもらう。悪から逃れた青年は、一時は運命にうち勝ったと思われたが、その恩知らずな行動を罰せられ、再び前と同じような困窮した苦しい状態に陥る。このようなときに青年は恩人のことを思い出し、聖職者を訪ね、迎え入れてもらう。

聖職者は青年の心が傷つき、社会や宗教に絶望しているけれど、精神も肉体も完全に墮落したわけではなく、まだ立ち直らせることができる考え、青年を救おうとする。聖職者はまず青年の信頼を得ることが大切だと考える。

そこで信頼を得るために

「恩恵を高く売りつけるようなことはせず、うるさがられるようなこともせず、説教することもなく、いつも青年の能力の程度に自分をおき、青年と同じような者なるために自分を小さな人物のようにみせた<sup>29)</sup>。」

また「聖職者は青年の言うことに耳をかたむけ、思いのままにしゃべらせておいた。悪いことを許しはしなかったが、どんなことにも関心を示した。無遠慮などがめだてをしておしゃべりをやめさせ、青年の心をしめつけるようなことはけっしてなかった<sup>30)</sup>。」

と聖職者はこうした態度で青年にする。

その結果、青年は告白するつもりではなく、なにかかも告白してしまう。この聖職者の態度は青年にざんげや告白を強要することなく、自ら告白させるまでに青年の信

頼を得ている点が重要である。これは聖職者が教師として、青年を指導する立場にありながらも、寛容な態度で接することによって、青年の信頼を勝ち得ていることがわかる。

ここでは、信頼を得るといふことの重要さはもちろんであるが、教師として生徒に接する際の態度のあり方がしめされ、青年教育に対してとるべき教師の態度が描かれている。

そして、聖職者は青年に対する指導法を考え、自尊心と自分に対する尊敬の念を目覚めさせようと、青年をいろいろな書物によって間接的に教育を施し、青年の自分自身に対する評価を回復させた。こうして青年は絶望した懐疑的な態度から抜け出し、積極的な生活態度を取り戻すに至る。

そして青年は聖職者と暮らしていくうちに、模範的で非難する点のない聖職者を尊敬するようになっていく。

だが、この聖職者と暮らしを共にしていくなかで、青年には聖職者の言動に不思議な点があることに気がつく。それは「ときどき、かれがローマ教会の教理と反対のことを承認したり、ローマ教会のあらゆる儀式をたいして重んじていないようなことを言ったりする（中略）ところが、だれも見えていないところでも、公衆の面前におけると同じように規則正しくかれが聖職者としての務めを果たしている<sup>31)</sup>」という点であった。

また、「いったい誰が幸福になれるのです」と言う青年の問いにこの聖職者は私が幸福なのだ と答える。青年はこのような辺りな場所で細々と司祭として生活しているこの聖職者のどこが幸福なのか、幸福であるとすれば、幸福になるためにどのようなことをしたのか、まったく分からず聖職者に説明を求める。すると、これまで青年の話をすべて聞いたのだから、聖職者も自分自身について、そして青年の疑問に答えるために告白をするつもりであると言う。そして次の日の朝、二人は丘に登り、聖職者は語り始める。

#### サヴォワ助任司祭の信仰告白

サヴォワ助任司祭は貧しい農民の子として生まれだが、両親の考えから司祭になるようにと学問をする。念願叶い聖職者になるが、その後犯した過ちのため捕らえられ、職務を停止され、追放される。その時に司祭は今の青年と同じような状態に落ち込んでしまっ、懐疑的で不安と混乱を抱えた生活を送っていた。

「あらゆることに決定をくだし、疑いをもつことをいっさい許さない教会に属するものとして生まれていたわたしには、ただ一つのことを否定してもそのほかのすべての



ことも否定することになるということ、そしていろいろある不条理な決定を承認することが不可能だった(中略)すべてを信じるのだ、とわたしに言うことによって、人々は、わたしにはなにひとつ信じるができないようにしていた<sup>32)</sup>。」

そのような状況で司祭は書物をひらき、哲学者の意見を聞こうとする。しかし哲学者は傲慢で独断的なだけで、論争しかしていない。司祭は哲学者に疑惑を深められただけで、何も解決してくれないことを知る。

そして自分自身に関係する事柄だけを「内なる光」を頼りに考えてみることを決心する。司祭はこの内なる光に照らし合わせ、真理に対する愛だけを哲学として、3つの格率を引き出すに至る。

第1の信条。まず物質には2種類の運動があり、ひとつは他から与えられる運動で、もうひとつは自発的な意志の運動である。物質が生命でない場合はこれは他から与えられた運動であるはずなのだが、宇宙は物質でありながら運動している。運動の最初の原因は物質のうちにはなく、他の運動によって生じたのではない運動は自発的、意志的な行為によるものだ。意志のないところには本当の行動は存在しない。

第2の信条。宇宙の物質がある一定の法則で運動している時にはある英知を示している。世界は力強い賢明なある意志に支配されている。この宇宙を動かし、万物に秩序を与えている存在者を神と呼ぶ。

第3の信条。自由が無ければ本当の意志はなく、あらゆる行動の根源は自由な存在者の意志にある。人間は非物質的な実体によって、自由な者として生命を与えられている。

司祭はこの3つの信条を引き出し、

「自分を地上においた者の意図にそってこの世におけるわたしの使命をはたすためにはどういう規則を自分に課さなければならないかを探求することが残されている<sup>33)</sup>」

と言い、善と幸福について今後の自分の行動を考えていく。

「自分がしたいと思っていることについて、自分の心にきくだけでいい。わたしがよいと感じていることはすべてよいことなのだ。悪いと感じていることはすべて悪いことなのだ。いちばん優れた決疑論者は良心なのだ<sup>34)</sup>。」

良心こそは魂の声であり、良心が案内するように行動することが善であり、幸福につながるものであると司祭は自分の行うべき道を導くのである。

良心に判断を仰ぐ時、人間の心を喜ばせるのは他人の苦痛ではなく幸福で、自分自身の行動で快いのは意地悪な行いではなく親切な行いであると例を挙げてみせる。

「良心！良心！神聖な本能、滅びることなき天上の声、無知無能ではあるが知性をも

つ自由な存在の確実な案内者、善悪の誤りなき判定者、人間を神と同じような者にしてくれるもの、おんみこそ人間の本性を優れたものとし、その行動に道徳性を与えているのだ<sup>35)</sup>。」

ところで、これまでの司祭の話から司祭の中に自然宗教を見ることはできても、司祭がカトリックの司祭としての務めをまじめに行っているのはなぜかという、もう一つの青年の問いに対する答えは見出せない。司祭はこの問いに対してもまず、「内なる声」に耳を傾けることから始める。

「すべての民族が神に語らせようと考えついて以来、あらゆる民族はそれぞれの流儀で神に語らせ、自分が望んでいることを神に語らせた。神が人間の心に語っていることだけに人々が耳をかたむけていたとしたら、地上にはこれまでただひとつの宗教しかなかったにちがいないのだ<sup>36)</sup>。」

司祭はすべての宗教は人間によって証言されているにすぎないことを非難する。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の啓示が伝えられた言葉はもう誰も使用していない言葉であること、さらにそれらの聖典も啓示の言葉で記されているのではなく、人間が翻訳したものであることを言及する。

しかし各宗教はそれぞれの国と民族において一種の制度としては有益であるとしている。司祭は宗教と宗教の儀式を別のもので考え、神が求めているものは心の信仰であり、儀式のやり方や聖職者の衣服、唱える文句には大きな関心をはらっていないことを強調する。

それは「神にふさわしい形式で神をうやまうなら、それらの宗教はすべてけっこうなものだと私わたしは信じている<sup>37)</sup>」

という司祭の宗教観に他ならない。したがって司祭がカトリックに儀式を忠実に実行していたのは、彼がカトリックに属する司祭であったゆえである。神を信仰するならば、それがどんな形式のものであれ、神はそれを退けることはしない。神を敬う時には形式よりも「内なる声」、「良心」に従い、内面的な信仰が最も大切であることを述べる。

そして司祭はこの話を聞いていた青年に祖国に帰り、家族が信じていた宗教に戻り、敬虔な心でその宗教を棄てることなく信じなさいと言い、この告白を終える。

## 終わりに

以上が18世紀の社会の中で執筆、発表され、サヴォア助任司祭の言葉に託された『エミール』に見るルソーの宗教観である。

このなかで特に「良心」の存在の重要性が説かれている。「良心」の存在に気づいたことで迷いと不安から脱出し、「良心」に従うことでこれから生きる希望と幸福を得られるという。

この結論に至ったルソーは人類に国、民族、宗教を超えた普遍的意志を提示する。これこそは『エミール』全体をとおしてルソーが読者に示し、訴えかけてきたものである。「内なる声」、「良心」に従い生きることは、例えば現代社会におけるイスラム原理主義に台頭される混迷する宗教問題などにも、有用され、用いることができる。宗教問題を考える時、ルソーの宗教観は大きな示唆を与えてくれる。

今後は、『エミール』全体をとおしての教育論が現代社会においていかなる今日性を持っているのか、また日本においてルソーの教育思想はどのように受け入れられてきたかを考察していくことが課題である。

## 注

- 1) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編『世界歴史大系 フランス史2』(山川出版社, 1996年) p.296
- 2) 服部春彦, 谷川稔編『フランス近代史』(ミネルヴァ書房, 1993年) p.42
- 3) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編, 前掲書, p.297
- 4) 平野一郎, 松島鈞編『西欧民衆教育史』(黎明書房, 1981年) p.36
- 5) 同書, p.37
- 6) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編, 前掲書, p.297
- 7) ロジェ・シャルティエ, グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』(大修館書店, 2000年)(第11章 十八世紀に読書革命は起こったか ラインハルト・ヴィットマン) p.407
- 8) ロベール・マンデルー『民衆本の世界 17・18世紀フランスの民衆文化』二宮宏之, 長谷川輝夫訳(人文書院, 1988年) p.25
- 9) 松浦義弘『フランス革命の社会史』(山川出版社, 1997年) p.18
- 10) ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳(岩波書店, 1994年) p.104
- 11) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編, 前掲書, p.305
- 12) R.シャルチエ『読書の文化史』福井憲彦訳(新曜社, 1992年) p.88
- 13) ロジェ・シャルチエ, 前掲書, p.107
- 14) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編, 前掲書, p.305
- 15) 服部春彦, 谷川稔編, 前掲書, p.41
- 16) J.カーター, P.H.ムーア編『西洋をきづいた書物』(西洋書誌研究会訳, 雄松堂書店, 1977年)
- 17) ロジェ・シャルチエ, 前掲書, p.109
- 18) 服部春彦, 谷川稔編, 前掲書, p.45
- 19) ロジェ・シャルチエ, 前掲書, p.150
- 20) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編, 前掲書, p.330
- 21) ロジェ・シャルチエ, 前掲書, p.148
- 22) ルソー『エミール(中)』今野一雄訳(岩波書店, 1963年) p.103.

- 23) 同書, p.104
- 24) 同書, p.104
- 25) 同書, p.105
- 26) 同書, p.109
- 27) 同書, p.109
- 28) ルソー『告白録』井上究一郎訳(河出書房, 1968年) p.80
- 29) 同書, p.114
- 30) 同書, p.114
- 31) 同書, p.117
- 32) 同書, p.124
- 33) 同書, p.163
- 34) 同書, p.164
- 35) 同書, p.172
- 36) 同書, p.184
- 37) 同書, p.212

### 《参考文献》

- ルソー『エミール』今野一雄訳(岩波文庫, 1963年)
- 梅根悟『ルソー「エミール」入門』(明治図書出版株式会社, 1971年)
- G.ホルムステン『ルソー』加茂直樹, 高田信良訳(理想社, 1985年)
- 桑原武夫編『ルソー研究 第二版』(岩波書店, 1968年)
- 吉澤昇, 為本六花治, 堀尾輝久『ルソーエミール入門』(有斐閣新書, 1978年)
- 沼田裕之『ルソーの人間観 『エミール』での人間と市民の対話』(風間書店, 1980年)
- ダニエル・モルネ『十八世紀フランス思想 ヴォルテール, ディドロ, ルソー』市川慎一, 遠藤真人訳(大修館書店, 1990年)
- 五十嵐良雄『j. j. ルソーの教育論』(現代書館, 1996年)
- 稲富栄次郎『ルソオの教育思想』(福村出版株式会社, 1954年)
- 小林善彦『誇り高き市民—ルソーになったジャン=ジャック』(岩波書店, 2001年)
- 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編『世界歴史大系 フランス史2』(山川出版社, 1996年)
- 服部春彦, 谷川稔編『フランス近代史』(ミネルヴァ書房, 1993年)
- 平野一郎, 松島鈞編『西欧民衆教育史』(黎明書房, 1981年)
- ロジェ・シャルティエ, グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』(大修館書店, 2000年)
- ロジェ・シャルチエ『読書と読者』長谷川輝夫, 宮下志朗訳(みすず書房, 1994年)
- ロベール・マンドルー『民衆本の世界 17・18世紀フランスの民衆文化』二宮宏之, 長谷川輝夫訳(人文書院, 1988年)
- ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳(岩波書店, 1994年)
- R.シャルチエ『読書の文化史』福井憲彦訳(新曜社, 1992年)
- J.カーター, P.H.ムーア編『西洋をきづいた書物』(西洋書誌研究会訳, 雄松堂書店, 1977年)